2002年度
海外研修KYOのあけぼの会研修事業

2002年11月6日（水） 於:高台寺・圓徳院

安土桃山時代の女性の生き方

海外に目を向ける秀吉を支えたねねの生き方に学ぶ

23名の会員の参加のもと東山山麓にある高台寺と圓徳院を訪ねて、一際、あでやかな今年の紅葉に迎えられ、400年をさかのぼる都の文化に触れる至福のひとときを体験しました。

ご住職 後藤典生師からは秀吉を支えつづけた女性の生き方 特にねねの行き届いた気配りや献身的な生涯から現代女性への教訓をも含めて興味深いご法話を拝聴する事が出来ました。

■ 高台寺住職 後藤典生師法話

高台寺は、秀吉と北の政所のねねを祀っている寺ですが、そもそもは、ねねが秀吉の菩提を弔うべく建立したお寺なのです。

水飲み百姓のせがれから身を起こし、ついに天下をとった秀吉の若き頃、ねねは門構えの許された士分の家の娘でありましたが、秀吉の求婚に、両親の反対にも拘らず、応じたのです。秀吉の人間性に、強く惹かれたわけでしょう。秀吉の人心掌握については、御所の連中、諸大名にも及んだ類稀な非凡さは遍く知られるところです。さほど美男子でもない、将来性も定かでない身分にして、ねねの心をすっかり掴んだ秀吉だったのです。余談ですがNHK大河ドラマ「利家とまつ」では、利家・まつの二人は相思相愛の筋書きになっていますが、利家はねねに心奪われ、日参していた事実があります。

数年前、秀吉の手紙が発見されました。NHKの調べによりますと、小田原合戦の陣中からねね宛にしたためたもので、「ねね、わしが出かける時、お前の顔色が悪かった。一番気になるのは、戦いのことではなくてお前の体のこと。一日も早く元気になってくれ、身体だけは注意してくれ、おれも一日も早く帰るから。」とありました。この、ねねを思いやる優しい秀吉の心根が読む人の心を打ちます。きっと秀吉は、周囲の人達にこんな暖かい心づかいを示してきたのだとおもいます。秀吉の出世の運は、自らの気配りが引き寄せたのだと思っています。高台寺に来られた方々にお願いしていますのは、この秀吉の心に触れて帰っていただきたいことです。

この寺の庭に、日本で一番古い大きな桜、しだれ桜があります。普通しだれ桜の寿命は80才といわれています。山に咲く紅しだれ、山桜は何百年も長生きします。ここのしだれ桜は百数十年もちました。4年前の12月に、芽が出なくなりました。翌年の4月に花をつけるには、栄養を入れて治療が必要だとの庭師の診断でした。私は若い桜ではないので、放ってやってほしいと申しました。そうしたら、その桜は枯れてしまいました。仏教には大切な心があります。「死ぬ時には死ねばよい。生きるときには生きればよい。」死ぬ時になって、やるべき事が半分も出来ていない、今死ねない、死にたくない、こう考えるのが人間です。 人間、やりたいことを完結させて死ねる人間なんか、誰もいないですよ。生前多くの事をやればやる程、死ぬときにはやり残しが多くなります。仏教徒になるということは、多くの積残しを残し、心配事も次の世代にゆずって、死をおおらかに受け入れていく、死ぬときに死ねばよい、これが仏教徒です。死ぬときにばたばたするのはみっともない。生きるときは最期の1分1秒まで生きるのだとお釈迦さまが言っておられる。昔も脳卒中が多かった。今はリハビリがありますが、お釈迦さまの時代には、寝たら寝たきりという人が多かった。みんな寝たきりになったら死にたいと言ったが、お釈迦さまは死ぬことをお許しになっていません。仏教徒は最期の1分1秒まで生きて生きて生き抜けと言っておられる。そんな人達は、人に迷惑をかけて生きられない、どうすればよいのか、共に肩を抱き合い弱い者同志生きていけと、説かれています。死ぬ時には死ぬんだから、生きている時は生き抜け、これが仏教徒のつとめであります。

北の政所ねねさんは、仏門に帰依する立派な仏教徒でありました。慶長3年8月18日、今から400年ちょっと前、秀吉が大阪城で亡くなり、ねねさんはお城を秀頼に譲ったあと、秀吉の菩提を弔うべく圓徳院に移って高台寺造営にあたりました。その間、辛いこと悲しいことの続く中、顔には些かも出さず、いつも屈託のない、こだわりのない人生を喜ばれた、と側近の日記に残っています。これは、すごいことであります。皆さん、辛いこと、苦しいこと、悩み事を一杯持ち合わせておられると思います。みんな腹に問題を抱えて生きています。ねねさんも同じだったでしょう。ねねさんの生き方に大いに学んでいただきたいと思います。400年経た今も、ねねの道、ねねのお寺、ねねにまつわる言葉が高台寺周辺に飛びかっています。どうぞ、ねねさんの心に触れてお帰り頂くことをお願いします。

今日は折角お寺に見えました皆さんですから、もう一つお話を進めたいと思います。それは、本当の信仰についてであります。これだけ尽くしたから見返りが欲しいというのでは、どんな親切も価値はなくなります。神仏を尊ぶ気持ちにおいても同様であります。お詣りをしたから見返りを頼むのではなく、神仏を敬い、祖先を敬う礼拝だけで終わるのです。これがまことの信仰、仏教徒の信仰なのです。

※子供の教育についてのお話をいただきましたが、紙面の都合で割愛させていただきました。

「しのぶ愛」の心をまなぶ

森田 重美

紅葉の美しい秋日の11月6日、「海外研修KYOのあけぼの会」の研修会。

京の東山山麓に豊臣秀吉公の菩提を弔うために北の政所が開創した高台寺と北の政所（ねね）の終焉の地、京、東山の圓徳院を見学いたしました。

高台寺の石組みのみごとな庭園や、伏見から移建した、傘亭（竹が放射状に組まれ、カラカサを開けたように見える）や時雨亭、遺芳庵、又圓徳院の障壁画にみる荒れ狂う波涛から一気に天を目ざす白龍に秀吉の生きざまをうかがい知ることが出来ました。

高台寺住職の後藤典生師の法話に、安土桃山時代の女性の生き方「ねね」に近づいた気持ちになりました。秀吉の生きざま、ねねの心、おおらかな人生観の持主、又生き方、等々、400年も前の人なのに今も愛し愛される人柄は仏教の教えである「陰徳をつむ」心、ひたすら自分から愛する、「しのぶ愛」こうした日本人の心が大切であること、その心が今の私達には欠けているのではないかとの住職の法話にうなづいて聞き入りました。

私達は今の世の中が悪いというまえに、もっと子ども達の教育や、生き方を学び、少しでも世のため、人のために役立つことに心することの大切さを学んだ1日でした。

最後にこの法話の中で佛教の教えである

“生きるときには生き、死ぬときには死ね”

の言葉は強く印象にのこりました。